

附編 山王遺跡第16次調査出土の小形仿製鏡について (九州大学 田尻義了)

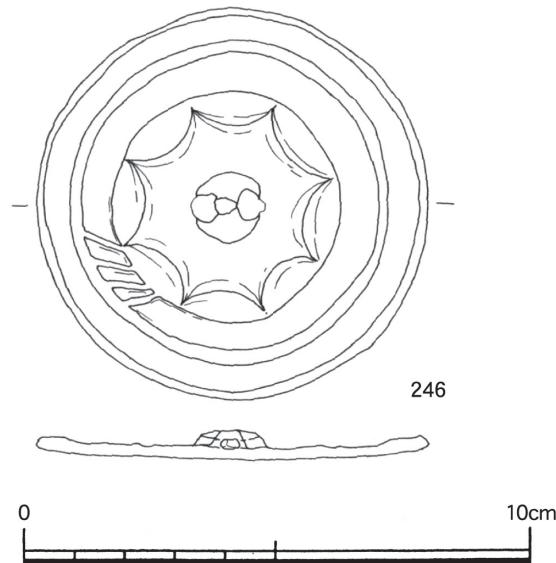
本資料（第20図154）はSE119より出土した弥生時代後期に鋳造された小形仿製鏡である。現在の面径は7.7cmをはかり、文様構成は外側より縁一時計回りの櫛歯文—円圏—内行花文（浮彫8花文）—円圏—鉢であり内行花文系小形仿製鏡第2型b類に相当する。本資料の特徴は、文様の一部が不鮮明になっており、その箇所が鉢孔の方向と一致している。他の小形仿製鏡でも認められるこの様相は、湯口方向を示していると想定できる。これまで出土している小形仿製鏡の鋳型で、湯口と鉢孔が彫り込まれ位置関係が判明している資料（須玖坂本遺跡出土鋳型、ヒルハタ遺跡出土鋳型、井尻B遺跡出土）は、いずれも鉢孔の延長線上に湯口が設置されている。したがって、湯口を上にして鋳型を設置した場合、湯口に近い箇所の圧力が小さいため文様が不鮮明になり、湯口から離れた箇所の文様が鮮明に鋳出されると考えられるからである。本資料もこれまで出土している小形仿製鏡と同様にそうした特徴が認められることから、同じような鋳型で製作された資料と判断できる。

次に本資料の類例について述べる。内行花文系小形仿製鏡第2型b類で面径7.7cm前後、8花文の鏡のうち、資料に類似しているのは熊本県菊池市に所在する小野崎遺跡から出土した小形仿製鏡である（第27図）。小野崎遺跡からは8面の小形仿製鏡が出土しているが、そのうち報告書で246とされる鏡に本資料は極めて近い。面径は7.6cmであり、文様構成は外側から縁一時計回りの櫛歯文—円圏—内行花文（浮彫8花文）—鉢である。鉢の周りの円圏が報告書では図化記載されていないが、表面がかなり鋸で覆われており、本来は存在するのかもしれない。鉢孔方向と内行花文の配置位置も極めて類似しており、同范関係に近い鏡である可能性がある。今後、両者の鏡を詳細に検討する必要があろう。

最後に、山王遺跡周辺の遺跡から出土した小形仿製鏡と本資料の比較である。山王遺跡周辺の近隣遺跡のうち、これまで小形仿製鏡が確認されているのは比恵遺跡第91次調査の現代攪乱孔より出土した資料である。比恵遺跡第91次調査出土鏡は内行花文帶が弧線で表現されていることから、山王遺跡出土の本資料より若干後続する段階の資料である。御笠川と那珂川にはさまれた洪積台地上では、その他に少し南に離れるが井尻B遺跡第17次調査より内行花文鏡系小形仿製鏡第2型a類が1面出土している。井尻B遺跡第17次調査出土鏡とあわせてみると、内行花文系小形仿製鏡を一定期間入手し続けていた様相が復元できる。

【第27図出典】

高見淳編 2006『小野崎遺跡』菊地市文化財調査報告第1集



第27図
小野崎遺跡出土鏡（高見淳編 2006 より）